阿波しめくさ二篇

五

仁
366
分

門號 365

無二膏や薬能かうのきゝめより

春乃よおさな情文

気かうかうかいゆうりつけても

孝行にかゝるの傳受

脇坂義堂愚述

○先生曰く。御癖をなをさせまする申すまするには
追々此観相人唯今御出なされし郡山の御じいは恐入いた
ぬしも人の身でと幸に御伺ひ申て私義は存知て
存分そもとかく彼継母殿がむつかしく口論を
すでに大破談にも及べき處を先生の御意見にて。
いろいろ心相をあらためかくならぬかんにんいたし

今までじゆう此たびは仕方なく夫れをまもり
厄中でもすらかやうな時も心相にて破相の相も
なくなりますなる
○八翁の曰く其れに先達てより如くならぬかんにん
いたされたればこそ孝子の相したる者あれば天幸を
おしてそれ破まい出来ざれしをこゝへいる所
まで此かんにんそしてならぬ又はかんにんする所の心相が
なれは人に示し破る相しならぬかんにんを

ほうこうせられよ。○評字の曰、切々是はおほきなかた。是までの苦労しんばう数年そのかんにんに。かんにんとかさね。辛苦をたまへてそ今までといふ日に、てもかんにん此上のかんにんはまく母に、ちやせぬ。こころされておそでは仕まとよかに仕やしいにきでませぬ。○翁の曰、きせめおろさまにおんで仕まとうよれかくごじやきおかかごしい世の中は誰もかまても皆せめろされておんで仕舞のしや酒を

好は酒色にせめさいなまれて死んでしまひ。貧乏人はびんぼうにせめさいなまれて死んで仕舞ふ。金持は金のために一生をせめさいなまれて死んで仕舞ふ。是等はみな道ならぬ死にを死ぬる也。中にても忠や道のために死をするそ孝いたり。僧は法のために死し、家来は主君のために死し、妻は夫のために死し、弟子は師のために死す。ましていはんや義理のある親のためにすることなれば

孝道の幸ひにして是にはしらる人は果報を。
手がらとたれ孝子に、我身をしなだまれを
何んのかれとい、我身がおのでやりまれ、我身を。
討し殺して佐倉心桐ふなりまるつ浄む
瀬の長命多る桐しをるら式人の棲ぐられ
むかしくの事たやさるん自都猿沢のおくのふ。
市と進しをんいふのいかって夫婦内福よ蓄
せしが女子一人出生して名をれおしもそ待

わが此おとしが五つの時、母はむなしく逝去を
うせ、又市と進後妻ばむへて出後つまふ一人
の男子を又一人は女子をも出生して倖かりが父を
おもしが九つの春、母はむなしく辞りしかれ。
あはれ、おもしは世をり便たりれ身とはなりて人を
見ては羨んじ、あそれは思ひ待るふ母は慕しれ。
哭りて此おとしをはん太に悪み新たのあるぢやうて
なき事物く我が生まれし二人は子をまへいつく

着せて。おもしろきハ身を罰のいたらざる衣をあたへ。
夜ハあつき布をかけ。式日ハ食をあたへまで。
目ふれてうちやく中へ世ておそ論じた。
妙なるまじいへなるふおふしも。〇おもしいなくとらるまで。
母ハ母の道なれども出ある子これの為をもすてし。
男を捨て他へ流れ二人おもひよ實心あはく。
其重しけるの又をこの子二人れいおもひも母の
あしたるもいでて姉がそれをみるとひとや。

姉を大切にしたる事神にすれ。〇母是
まして兼々いおもとをふかみ深く式なきに出るる。
熱湯の中にそれ湯を濡し湯氣ふさへとも目をもらむ
為にそれを盥へ入まそ。おもてにむらひ汝も身も此湯の
さかんなる火にて世ものも鬼の罪人を地獄の釜へ
せめいるよふにたらふ。おそれたる心も魂ハ消て。
かれしく作まで四肢すへて骨々母をあしたふ
狂しむするを命も是ハかぎりかたおもしろく苦痛して

かし湯のたてすぎし。すでに湯にむかひし折ふしに
おく今年十一才なりけるが太なる桶にあまり
入て持来の此盥へ速に手伝して姉瀬り。
我さんふいりんて飛込しに母をおどろかしいでき
あゆしが身の皮やぶれ肉そぶれて二ケ月ばかり
床に休みぬ。㊦母は悩しくおもひてみな恐ろしけく
あつき酒をと茶椀に入まて何角一ゆしか薬を
加へおもて是を紙にて呑べし此薬ものなど。

冥加なく成ぬる薬し。実たけくふ。㊦おもひは前方
たくはわやしきそのしいかのねばり。押いだしそ。
呑んとするを妹此とし九才なりしが姉が茶碗
をとりてみなくなるは薬なれど我呑ん
と口に紙をあてにおまりと。㊦母はこれをききて茶碗を
たゞちに我實の子ならば呑せざりき。かくれ
歎ひ度くなりたまひし。おもとい母を恨ん。
後ふに又夜縄母大病にかゝりそれまでにおやうく。

侍りしと。◯おしゑは是を大ふなげきて猿沢の
ほとりなる観世音へ日ごとに詣でゝ母が病をも
いのりのみ願ひ侍りてし父母が命数すて母は
命はかぎる期もあれば我命をつゞめて母の
たすけ給はれと侍へし相かけさせていのりし
孝心通じ終に母も全快しぬ◯しかりしと既事
かぎりありし今年八月十五夜九月九の昔におきも
母に申けるは我是より観世音へ月參をたち

まゐりて侍へなり我ら此度の大願ゆゑ侍りて
母の全快しるの御礼に詣でゝ我なりしらかひ
ちには。◯母はいそぎて起はて扱て姫が
病気全快の御礼を参るがまゝに悦しく侍る
とやて國子を侍へてのたまへし悔や道すて
フト過て猿沢の池にまつ落たまりてそ死し掛
ならたまし自然にそ池にたゆみてありける母は
よろこびて誠の孝行なるべしとほしさげるれ

言葉ふかし。○いおとしは寂を耳にとゞめん備へりの紙
衣着へて観世音へまいりし寺に御礼そのくまぐ
母の長命を深く祈念し侍りて帰る道に猿沢の
池を詠しまして。いとゞはじしくあはれなる秋の景
色空ぞ今宵澄る月影のかゞみ見えおどろく池のにかゞやけ
影しうつるをみて。折しも生しず源どびろく
来りし侍りておもへば思ふもかりてくるも我が
心にも夢のこしのあるりんこゑを生きの母様の

月見の夢に我をいざなひて此所しまひのいて
あまた拝みまゐるを上りしものでさや下りまで
うでさ守つてもふを月よ池りも月よし我を抱たれ
しまそぬさましし言葉の幼き耳にはおしが
今池のふうなる月よふるてよし母は。おもかげを
そこしれ月見る心地のなげし侍りてかなしくば。
俺さいぢは母まいらし月見の夜提灯
やられ抱かこの人こゑをいざなはしまのうして。

女はいよ〳〵詞の其よりくだはきと。拝し侍りぬ。
能さるとれ。扨て侍りし涙くむしくて。腰毎に
かなしけれはこそ。未りの今もなや七とせ以前。
得とく父をこゝろをも。母君も幼くて
まいれ侍りて。覚えねども。今宵の月に。所有
しそこに父母の御姿を。今ひとつの頃にも
思る心地し侍りし。涙の雨に袖を志ぼりて。
「たゝましけれ月にあそれのますかゞみ。

父母のすぎさりし世を。
詠じて思ひ出しつ。世の理ぞかなしき
其そ我れ生みの母は。幼くてまかれ侍りつ。父また
九歳の時に別れ侍りしが。今は母様ばかりも覚え
てをこまかく取て。みまかりて。なく〳〵御毒害あそ
きれ数をも二人の兄弟に助けられ。すぐに
今宵もなきけるに。こゝろ落て死したる。
母はふたゝび孝行をなし世のかなしき言葉を

是ハ思へども不浄がまして。かなはぬ時ハ行を清。
毒害をたくみにいたりて悲しき。母の悪名を
出し。世に知らさんとならバ父母の恥なれバ月やどる。
此池にしづみ身をかけてうせなんとすれバ。まづ其狂気
乱心をなだめし。世の人の思ひはなく母のあしき名
出さず。是其志の孝をたてんとさへ中せ
此事をかなしきハ生の母に。是を抱ひて此所に
まいりつゝてはやく成人せんことをねがひし父の

毎日此所へいざりひきよりて。彼を抱し。此
子にあはん事を楽しみとせし。此所にて今身
をたすけてうせなんとするより。是因縁ぞや。
南無大慈大悲の観世音君にてらし給ひて。
實の父母ハ極楽にてまします。又汝が
居る所の母の悪名をぞく陸奥長命
の人なり。二人ハおさなきの身の息留主て成人し。
末廣くしと栄へ給へ。やがて世の人にいはれて

きれ申し。いさゝかも扨よ武士たるもの自分にうつりて。我を愛し勘気しぞや。死する命は露ちる程も惜しからねども兄や妹は別るゝのは、かなしきぞや。かやうに成るならんとは知るよしもなし二人の新りかんで是での深切に一礼を申しのべ勘気をも心ながらもいふ子すべきふかくも今はいふぞや。やい此男はうせるとも其方二人が心は生きてひとへに頼みまするぞ常人の事を守るぞや。といひしかば二人がうけて。

にし

池のうへにさらしものひ

〽これ妻ながら我と名残のかゞみ　かくれつまでも　あはれなる跡

〽池のうへ捨る此身はすまじしを　南無と母の名をば呼ぶする

かくと詠みてすぐに池へ飛こんでせし。弟の袖と姉が留まりてそしをしたり頭をめぐらし是を見れば申し妹がうへぶりこそうれしくも。

二人は童を抱きしめ泣きかなしく。○二人ながら家へは
来て。○なりかしおゝやあはれさうしてくらうどしや
れいかなる罪の報かや。○きのふまで。○二人は
童もかけまもり。○みな母さん弟に死にわかれしや。○
いつくしまも此二人は姉さん兄弟にて。○池へとなり
たまふ。○さて二人をよすがの力とするなりし。○妹をも
我も育まれて行もしに。○養は伸に観音を
家。○今で二人ながらもよく行て姉を助けや。○姉は今
猿沢の池へ身をしづめて行よ。○助けしとめて。○
わざわざさめて私がそうしてぞ。○かならずしも見る
姉さん母を助けに行けるも。○かなしかる者にあやと
手をひきてはしりがあれば。○ろて三度まではこひしと
こなしてまつりしなまかく。○あはれなりて待ちける
おゝや姉さんの死にたまふなれば此二人が先へ孝をも
心をまんとすれば。○童を抱きしめ抱きしめく
其の様よ此二人の姉を太切に思ひて待ける志し

ゐんし御礼七日やりまで二人ともかしこまりく。二人
おやうやうをしく姉がいふ事学訳あてかつまうせ
此姉はなふでもかうでも生て居たれば人誹りてぞや寿
二人の長命して御母さま人孝行いたしるむのし。
御父君へか追善をあつくいとし又此姉が實母様の。
いませへをもいとしなきうら此な姉が泣もまてたま
へ世は分くあずせ大やさいとるすを精出し姉ふ
かうて父母にもあげてたまはりしや是の

この身やせしぞやにて今は絶へまなきば。二人の声も。
おくをあげ消いるばかりに悲しみ立上りていけく
までも姉さまにしたひて行べしと又地に転へらん気勢ひ
たるに。ここに孝女は是をとどめ引まん兄弟二人おしとどめし。
うしろの方にあやしく聲つく佇む人は盲ほうし二人
これは是を見とられ継母なるにおどろきあれば。母泯
こいかなれなぞか声をあげいわるると見れば因縁や子は
三人ともに菩薩たりし。母は鬼にも蛇にもおそはれし悪人は

今更受候ていふべきやうもなく候へども訴も姉が言葉の
母や弟方にも候て面のあはれさ人を殺し候たる上は悪人が
様子を見て有りけれども只きくれども重悪業の科を免し給ふ。
我が身の呵責身にせまりまして ひとへに大悪人ども妻は
是をゆるしの上世の天道に候てゆるしのうへに二人の
子供を打もや二人の命は只姉よりも助けとまらせ給ひ
此人よ弟まで流し有らぬ身にそひて姉が言葉へ背くべしと。
言ひしが池に沈みておとすべくとする母を見て一代の

力は今まで仕へまゐらせ。○其事もいかさまに家がるかし。
母を殺せし心はまことの人ならずとも命を捨て候はば。
此人共ふかくも恥なく楽しくも世の中にて候ぞ。
重くべし誠にはかま帰せしかば。○母も喜び。
かぎりなく母死ぬまで母をたすけん今より孝をつくさんぞ。
深くも恐れ俺も深くより不実のおもてに
兄弟いつまでも二人の命も大きに悦び母と姉
共に伏拝し世にうれしくも有がたくも悦ぶなりの

然るに母も姉もたえずして大せふに付まそ供まゐらせ。ゝろこび淚よ袖をしぼりぬ。◯母ハふかく喜ばれ二人の子ハ格別に鬼神よ助さかし母ハ兄の今在守したふかし事は皆大慈大悲の御恵し大ふ感で觀世音を拜み奉りつたくまつり一首り。

人ならぬ身の猿澤もくもらすれ。るゆくハ圓々ちれし月影。

小衛じ智ひを立て悲をはらさぬ善を行して。

此後ハ親子三人のむつまじくして。世の人これをうらやまぬハなし。おもふに孝心二人の者がまことに母が悪をすみやかにあらため。大ぜん人となりし徳なりとて有しく。天道是を感じたまひし。次第に兄弟の名おきこえありしが式やんおきく雲井ぞしられ御前へ。おもむき孝をきこしめして。終りにまでも遂ひたまひて子孫ぞる。

それ。弟子ぞ等ハ二人の言を世にまゝに
たゞのしき富貴れ弟とれの母も目出度女を
やすらふ上なき果報の弟とハたゞるぬ
その物語り何かし学ふに此しけれハおやすや
きく指も仍んれのしいふしり唯今行うたゆ。
此席でもぐに。お女ふたりハきたれ辞仍ん
人死を聞たん人ぞ心相さへよくたまへ今の
継母の鬼蛇の相を忽た蛇への相したる心相

さへ行ふたしまへ此心を吉悪を善貧相を。
福相善を楽しれの短命下相も寿相とたる。
禍福門なし自まねく所として来るを。
唯心相れひとりたちな辞をとゝの
心相竟きとまゝ人だ竟の相貌禁ぞころ
あくでし禁結れ相したるし忽ちまへ今
より行たれ。ム千や。ク千や。まるる拙んとたま
捨ておもが四紙仰しておりかんふん。

殺されけれバ忽孝の相と変じ天此誠感
たすけ給ふていかれ母を道り至らしめ給ふ
ゑゝし母ハ母たらざれバ母の母さるべからず
あらバ汝が子の子も其の心相にあらざる所也
かよしかりせバ己が心相をば立帰りて
人とたゞ平生に我身を正しく行不浄をのぞき
時ハかならず我身よりもとより孝行ハ
相発すべし孝行の相と化へたまへバ。

そろ〳〵ひんでもふたりでも貧なりでも
文盲でも百行ハ孝にして万善ハ生ずると
学ふ事孫目出度大福相となるべしと
翁がさとしハ◯此おゐて大ふ感涙数行
みて涙し我が今までハきんおもへ
皆くたるかんにんげんでおもひ違ひした
唯今よりいるかんみんハ堕を好くし
承知いたしまして孝子ともの心相り

切度おしみ至り申しまし。

」ほかの人にたのんで見られます。

形ちよくて髭もおもしろく。

此方は〇そ耳に聞ましておぶい大髭で。

げじめそ口もきゝかし聞申した。

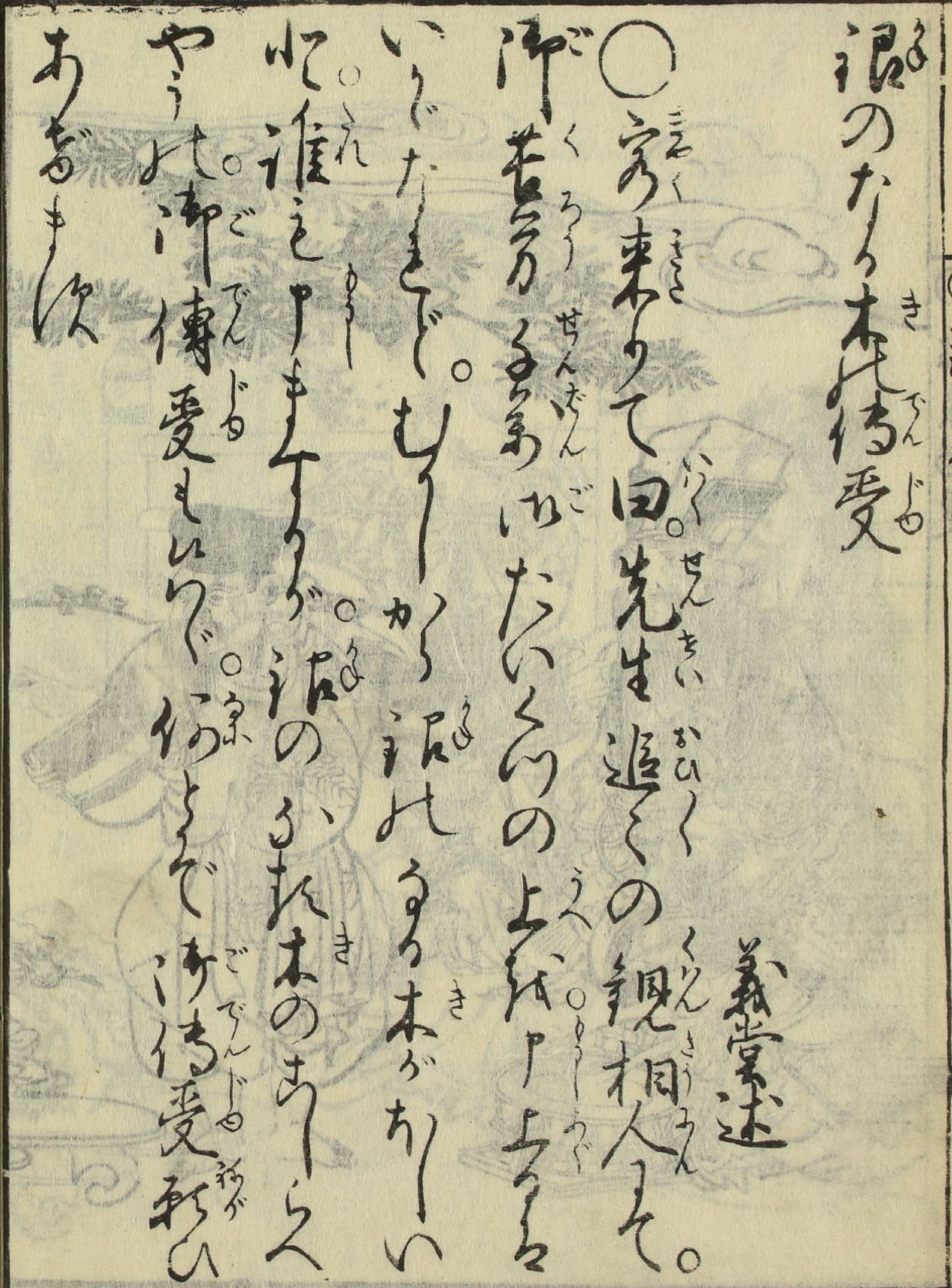
〇翁眼鏡をとりて曰ア、さうしたらば、

心相奇なる故人の訓言汝忽ちに

和合し子孫永昌福寿発達し至る

それの〇相貌をときちきらし〇体あり。

銀のなる木の傳授



誂のなる木の傳受

義堂述

○家来ありて曰。先生追々の観相人にて。御苦労千万なる事にはなにかの上紙やある
いかだきまでも。むかしから誂れなる木がおしい
此誰をやますが。誂のなる木のあしらへ
やうに御傳受もいでで。京まで御傳受致ひ
あるまじ候

○翁の曰。隨分ずいぶん。我心相の様子にて。
かねてなる木を顔のなる木も。たれたる
木を込のなれ木も。善なる木を悪の
たる木も出来る事の中に古今ありしも。
〱うゑて見るに。花は枝ぶりの里なし。
心かけありて有るは。やしなひれ。
兎角心の直所也。むかしく無可有の
郷に。変化木屋として以人植木屋ありて世あり

珍しく人を知らざる。○奇妙奇代の樹木
を下枝まで商ひなん。○或冨家此仏事。
東方の古寺にありしが。○土産に樹木をもち
帰りて。○此変木屋に売りしかば。○さすがハ
変木屋なりして。○家主是を重宝して俗の
さんば。○冨家の菓子を此家へ入て○何んぞ
珍敷木のなど求めしとやせバ○主乃
翁申に我家にハ珍らしき人樹木

不審なりし。○先其木様を見て曰
○冨家此菓子をそへていはく。○此木ハ世に
まれなり。此木ハ何と云木ぞと問へば。
○主此翁の曰。○其木ハ基本がなん
そこばくなり。○楠が出たく楠の枝
なり。○華も此花が咲て○其けしのまれ
よき松の木となり。○松の木なり。○福
ひとつの○積なり。○桜したなり。○桜の

枝(えだ)より ○サボテンが出来(でき) ○サボテンより ○枝(えだ)は
木(き)となりても すだの葉(は)より ○朝顔(あさがほ)がはへつたが
出来(でき)たれば ○朝顔(あさがほ)の花(はな)より ○松茸(まつたけ)が出来(でき) ○松(まつ)
だけの笠(かさ)より ○かいちやしたかかばちや ○
しやずいとのにいで出る ○藤(ふぢ)の花(はな)より
藤(ふぢ)は蔓(つる)より ○桐(きり)の木(き)が出来(でき) ○桐(きり)の木(き)
より麦(むぎ)になりけるたんして世(よ)に珍(めづ)
らしき ○木(き)はありはあるまいや

○何某(なにがし)わしらたちく ○幾(いく)○極(きそ)く世(よ)より珍敷(めづらしき)
事(こと)かぎりなし ○松屋(まつや)が土産(みやげ)に集(つく)し
揃(そろ)へ 学者(がくしや)雅人(がじん)風流(ふうが)なる人の ○珍(ちん)さんの御来
集(し)まれどもありふれし ○樹木(じゆき)あれば ○
未(いまだ)見ぬと申(まうし)けり ○さて幾(いく)○左様(さやう)なる ○
学者(がくしや)雅人(がじん)の土産(みやげ)なれば ○この ズット
ふるきのむかし ○古(こ)ろ ○木(き)がかうしるべし ○
○某(なにがし)の幾(いく)なる ○是(これ)はたるかの たらく ○

のびらき木明の此木の名ハ何と〳〵て
暑ゟ待まれ。◯主の曰此木ハかの言く。
ゆびらき惣性の氣といふ所たく学者や
雅人ハ此言をまんれ木がいつまん人たち
といふ◯柔の曰あれハからやりにこゝ也就
本るたんと也。◯主の曰あのかた
やりもくの木ハ若衆店中のさいのむ。
ありて若い人ハいらさみや若さかりと

いふ◯柔のいりくハ何の木ハ何らが出る年ぞ。
◯主の曰あれ木ハ元が酒氣でこそ酒
字まり桜び氣が出ると遊び氣より
色氣したら色氣よりさりだしれり。
さうらけだしや難義したら又節季
としれりてメッキもやくさしうらて終
まい親ゟし勤筆しかやりて。これ勤氣
より仕方かたり変る色勤當の花乃

咲まれ花たりがは望いおしげやと云。
○某れ回あのむきは根がゆがみ枝ちゞまり
しまるゆへともぞどうりおしろれ。
枝ふりて此の木からは何が出来ます。
○其の回あの根がゆがみ枝ちゞまり
木は老若男女ともふるしく好む木にて
此れ木の名は欲木といふむくは天縁し
枝ちまきゆがみくあるゆへあれ欲氣かしく。

ずりしてあり望まれてその花み氣しり
勝負木相場木が出て剛氣も悪氣
にもなりて終りは損氣なんだと云く
世に貧乏れ花咲きとはする此木なお花は
愛ずる世をもやる木なれが求ずはざるや。
○某の回相が望むは御女中またゐりた。
進物となるべき木をおもば求めかたし。
むかしより云ちいさきな木は何んとか申す。

○主の曰。女中方へは御進上ものなれど。たとへ少しきたりとも。あの小さき木が一段よろしかるべしといふ。○某の曰。いかさまちいさき木なれば何が出ませう。○主の曰。おれがきき木より出るがあるきくが其わけは鬱気がわるくなるといつきより積気もたまり癇気を出すばかり。狂気乱気もみなそこで喰気も出しはなる

氣も出まする。○女中方は此薮は。○此木が誠に一段よろしいといふ。○某の曰。それなんぼ木でもやはり花。○花がさいたといふのじやが。○主の曰。なるほど木に花がさくそのやうなもの知れた事。実のなるものじや。○某の曰。其実はどのやうな実が出ませう。○主の曰。ですから焼餅のやうな実が大に出来ます。○某の曰。此木は朝夕一人ぶんぶん

でござりませぬか又ゑにござりません
かなしいふやられるまでおざりましたよ。
○主の曰水をけつ事もなりんする世話も
いらん○唯○朝夕○かはりてたきつけ
さへませんで。ひとつ、おのづから○草へやりまして
もびこりまする○兎角今は世間○此ごとんなや。
欲なや又○酒なや○色なや○悋気なや○浮世の
木が繁昌いたしまして○仏の方もえん不者。

おざりませぬ。○其方をいろ〳〵と吟味し
給へば此の木を求めてきましたが。○いかう
枝ぶりで安く。○ひとりの人がきて草をえびらし
て。きましたほどに大極ほつらふきと見え
ぬへ。○某の曰成程いかさまおもしろき。
木にくれてを今何ともて是非とも。
樹のいりで見せぬへ。○主の曰木を植むつかし
き注文たらうまてといふ

一句地まひの木を見すべしとなりて
ゆゑに今も有し此木ハそんじて今此類もなし。
大きなる心地にて此木をうつし見んとさ
まへてのち。○其とくと在りける植し此
樹ハ根より庭からうまへて申すまで。
するがよ長き樹なる先此木ハ何とや名の
ありて又此樹より何くとや木がりでます
哉。○主人曰此樹ハ何の生までとまうすべく。

むかし事より名ハ正木と又此正木より
うつし出れバ実儀し徳義にて實儀徳義
より忠義を出す孝行木をも出てまする忠
木孝木より出るが仁義禮木にて其仁義
礼木より出まする花が見えしやうあの節
の花じやが何んと見事なものじやなァ。
あれ節季の花ハ四季をりふしおちぢれもすまず
おもくぬ旅より生命木として君の節木也。

やゝすがたまでも又世を塵んするなり。
き目出度樹ではあらざりぬ。
○某の曰。栄枯は是格なりて。なふぞく
拙者は此富貴や寿命木が求めたまはんあるぞ。
予ぞ是は紙縫ゐるべし。○主大に笑つて曰。
誰もそこを皆此富貴や寿命木を望むべけれど。
求めて得ることはなく迷惑して枯して
志まふの又廻しに来てする物也○その種を結し

此は此富貴寿命木は却つて此ぞやうが
無用の事と酒の為にせぬ。かまくこまへ色紙
むさぼるは枯ぞてしまへ。欲がふかけまだ。
損して志まへ。知恵に腹ぞて縁あるを遂くまんで。
かれて志まふ家業を定むるは損をしらで
志ゆへ。おごりもやぶさかなれば。からして志まふ。
朝寝をすれば損じ安く美食をとるせば
かまそて志まへ。足事を知るぎればからて

仕まつらんものとおもはれぞ。かまへてまもるべし。不忠
不孝を根として丸でうしなひたまへば中々にて
手段を許諾よりかくそのすへはおぼつかなし
まだ是非も止兄のまへにしらし。

○某此曰不及たまふは深く相たのしみ。
是非は此富貴も命木が求めて此樹の
あるひは何なにぞや其貫文よりはしかるかし
中あれども

○主の曰此安きや武士

文そてあつらへたもしき金のふき孔子の
伝はれ是貫なれば何くへもすべきがいまの
ぜふにはくい中くあつらへずして以上。

○某此曰被に何ほどの銭をそいあつらへのまへぞ。

○主の曰何ほどの是非とせしいきたなし
此富貴や其命木の活あるべし。若を山ほど
積みても其身のしゆせいのむしなるかし。
其ふくりしろき事にあらずや御富貴とも

積金以遺子孫
子孫未必能守積
書以遺子孫子孫
未必能讀不如積
陰德於冥々之中
以為子孫長久之
計

長命(ながいき)りをなかゝくおもひて○兎角山(とりくやま)
かじ善(ぜん)ありけるも事なかり○司馬温公(しばおんこう)を
冥(めいく)これうらに陰徳(いんとく)をつむしといふまうし○
めでたきもしれ○此陰徳(このいんとく)をたのむ人(ちくん)ぞ○
すぐに金(かね)乃なる木(き)をさしらへ家の秘(ひ)
伝(でん)の積(つみ)なる又酒色(しゆしよく)○剛欲(ごうよく)○分経(ふんけい)亡君(ぼうくん)○短気(たんき)よ
家業(かぎやう)不情(ぶせい)○勇(ゆう)を奢(おご)り○不忠(ふちう)不孝(ふかう)に
謎(なぞ)なく○ころげかなさけうすくしく○

不陰徳(ふいんとく)乃心相(しんさう)そきたちまち貧窮(びんぐう)にれ○
短命(たんめい)のなる木(き)うれしき○是(これ)欲深(ふか)くを慳(ねじ)
ふまく○諸(もろ)乃なる木をも○貧(ひん)なる木(き)も○
みえれだねのまた不形(こころ)の○
「世(よ)の人これんで○ある内出(うちで)の○小槌(こづち)なる○
福(ふく)をたゞ拾(ひろ)ふして○貧(ひん)をとぶそうし○
此道(このどうり)手をうくし○汝(かんぢ)あらための○
前(まへ)ゟ園霧(えんきり)の胃(おとこ)あり知識(ちしき)よ気(さん)じて○

我ら法のたからを得させたまへてや
志らば○知識忽ち菩提をさとりて仏の人
のさりしらば○彼の男は因縁をしれる
義をも同じ仏なりしらば○知識聞えて
因縁この志ゆりにしか識る此身をはなれて
語にあらればかの○をなしして人智も善
心をさむりしおそいふいへいらしむ○
又煩悩を楽し体で居まど証をうるべし○

身もなきゆへ海も志ゆりて此おもく
ふくそすれやがて含むるをさりて○
志ゆりし此如くこの身をはなれ常しかるぞ
かせずに遣て其敏念なく煩悩よりも自
御しかれ善は出る也証しかれ○音
あゆとしいへば志ゆりくをそなされしば喝ふ
事ならんに志ゆりくれ法おも
れいてかみを得ざれどもうつしにくるぞ

人は福田あつとゆへにかせうざれど。富む
ちくゐらも。人り長命のあつとゆへどを
養生をとらくせざれば。夭寿にいたるなれ
あくらん。汝を心のまゆりくを、おくつくれ。
菩提の証り。意せざ。福田古今變滅せ
ざるは。毒紙出しく人をも苦に導くは千万
其ほく今表のかねみは。たまなりいされ
ゐしと。好きまふ言下に發明しく

真乃長者と。たのしみや。基種を
裏は不紙らくく。合点して。真の長者
となりのたまへ。◯家老りつこし頓首
まくく回入。今日先生は御新して歌が腹
のうへ。諸乃たる本紙う忘すしたれど
火難盗難は。まりひをたましとまろこ
びけるとれ◯翁の回めつてり沖仍めき
まれよおんのうもんいの火難もあれど。

人心人欲ハ盗賊を。ちるはげしくて。
多ひ終りて。眼鏡を袋に納む。

手島先生教訓書目次

やしなひ草　全二冊
同二編　全二冊
かゞみ草　全二冊
同乃あまり　全二冊
女のをしへ　全二冊
貴賤安楽伝授　全三冊
開運出世伝授　全二冊
長命になる伝授　全二冊
孝行になる伝授
銭のたまる法の伝授　全二冊
御代の恩沢　全五冊
教孝児をしへ　全二冊
案山子草　全二冊
民の繁栄　全五冊
夜話荘子　全二冊
鈔善小語　全二冊
人教吾是疏　全二冊
家隆のなる伝授　全二冊
福相になる伝授
和合長久の伝授　全二冊

女用心様艸　全二冊

立身路中訓蒙　全二冊

捨つ舟艸　全二冊

教訓おつな艸

右ハすべて教訓の古歌などを多く集めて大成
なりしをのせさとし易くして後誦せしむるのつゞり
仁義の為めにへりて修身斉家の鑑とすべくそうず

初編　十冊
二編　十冊
三編　十冊
四編　十冊
五編　十冊

安楽問弁　全一冊

御代の恩　全一冊

鷄鳴問答　全一冊

丹堂遺稿　全一冊

鬼は外　全一冊

庭訓随筆　全一冊

福神教訓袋　全五冊

寺子大学教訓蒙　全一冊

教訓物書物類製本所
京都書林
三條通御幸町角
吉野屋仁兵衛板

和漢西洋書籍
文部省御藏版翻刻書
學校用書籍類
仕入賣捌處

下京第五區韓慶石町
三條通御幸町西入○五十六番地
津逮堂　大谷仁兵衛